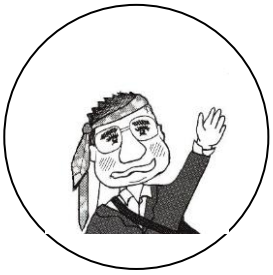
インド大魔王のエッセイ　　２０２５年３月号

大魔王のお笑い神話



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話
発行：トラベル・ミトラ・ジャパン　　ぽん子画
（530-0041）大阪市北区天神橋 1-18-25　第３マツイ・ビル 201　ＴＥＬ：06-6354-3011
お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。（E-mail：daimao@travelmitra.jp）

霧が覆い隠すシッキム王国の〝神秘〟（5）

わくわく感に満たされたインド車は、バグドグラ空港からシリグリーの街を抜けてヒマラヤ山麓にむかった。まだ平地だが緑の茶畑が前方に見えてきた。紅茶の産地ダージリンまでは、まだまだ遠い。ダージリンに上るには、二つの方法がある。

一つは乗用車である。大型バスはあの狭い山道ではムリで、ときに乗用車でも渋滞に巻き込まれる。

一つは世界遺産のヒマラヤ鉄道（DHR： Himalayan Railway）である。鉄道といっても、遊園地の機関車を少し大きくしたようなトイ・トレインである。ニュー・ジャルパイグリ駅（海抜 100m）からダージリン（2,134m）を結ぶ山岳鉄道である。

乗用車なら約３時間だが、トイ・トレインなら 88 キロを９時間かけて上ることになる。もっとも近年は乗用車でも渋滞で５時間程を要する。

ところで、マザー・テレサは１９４６年９月 10 日、ダージリンのロレット教会での黙想会に参列するために、このトイ・トレインに乗っていた。そのとき神からの強い呼びかけ「召命の中の召命」の霊的な体験をした。この呼びかけによって、マザーはカルカッタでの奉仕活動を決意した。

わが輩はトイ・トレインに乗ったことがない。１９８０年代インドに留学していた山下幸一、雨宮智子著『東ヒマラヤ山麓を訪ねて』を開いてみると、「夏休みだったせいもあって、二輛連結の小さな汽車はインド人ツーリストでいっぱいだった」、「ツーリストだけではなく、地元の人もずいぶんいる」とある。１９４６年頃は、ツーリスト（裕福な避暑客）は極めて少なく地元の住民が主であったと想像する。往路（上り）は穀物や鶏や生活必需品などが積み込まれ、復路（下り）は紅茶の輸送につかわれた。

その雑然とした人混みの狭い空間で「召命の中の召命」があったことは注目に値する。ヒマラヤ山中の行者は、洞窟・庵あるいは人里はなれた僧院で神秘体験をするのが一般的である。大雑把に言えば、神秘体験が「自己」に向かうのか、貧しい人たちに向かうのかの差になって現れたともいえる。

「召命の中の召命」は、英語では「**call within a call**」と表現する。さて、これを何と訳すのか。**Call** は呼び声、天職、使命、義務などの意味がある。グーグル翻訳にかけると「通話中に通話する」となる。「ご使命の中の義務」と訳せないこともない。インド的に解釈してみると、「**a call**」は絶対者（一者・ブラフマン）で、「**call**」は絶対者からの自己（アートマン）への呼びかけ、使命・義務などと解釈できるのではないか、と全く根拠ないことを考えてみた。それでは狭い解釈になるので、マザー・テレサ・ミッションの神父さまにお訊ねしてみた。

最初の「呼びかけ」と２番目の「呼びかけ」があったことを意味します。
最初の「呼びかけ」は、故郷を離れてロレットの修道会に入り、コルカタへの宣教者になる呼びかけです。
２番目の「呼びかけ」は、ロレット修道会から離れて、スラムで貧しい人への奉仕者になる呼びかけです。

なるほど、尋ねてみるものだと思った次第である。トイ・トレインの乗車中に霊的体験があったことは分かったが、さてその場所はどの辺りなのかと、どうでもよいことが気になった。調べてみると乗車して８キロの地点であると云われている。現在はニュー・ジャルパイグリ駅を始発とするが、その当時はシリグリー駅始発であった。そこから８キロというと、平地に連なる緑の茶畑が最初に見える丘、上り道にさしかかる手前の茶畑辺りになる。これも深読みすると、低地から高地（軽井沢のような別荘地）に至る手前、つまり人々の苦しみがある低地での霊的体験と考えることができる。それを記念した教会があると聞いたことがあるが確認できなかった。

本格的に山道を登り始めると、「野生の象に注意」の看板がみえてきた。一時間程上ると、チャンダンの滝が見えてきた。かつては徒歩で上がる人たちの休息の場であったであろうが、今やマイ・カー族の憩いの水場になっている。さらに上がると、州政府経営のツーリスト・ロッヂ（Oasis Café）がある。レストランから崖下のティスター川を眺めることができる。ここでトイレ休憩と高級紅茶でティー・タイムをとった。この際、バカ高い紅茶を飲んでみようとおもい注文してみた。しかしながら、わが輩にはその香味が分らなかった。やはりわが輩には、安い「ロプチュー・ティ」が身体にしみついているようだ。

そこから３時間ほどでダージリン（15：30）に着いた。さて、どうするか。とにかく元少女が持参したお土産（重くてギックリ腰になりそうな醤油、わが輩も食べてみたい高級チョコレート等）、それにわが輩が持ち込んだお供え物（大阪名物神宗の塩昆布、菓子屋の従兄が持って行けと送ってくれたお菓子類、愛妻がわが輩に買ってくれたＭサイズのパンツ＝小さい！）を日本のお寺（仏舎利塔）にもっていくことが先決であった。読者諸氏はこんな場所(標高 2000m)、ヒマラヤの高地にお寺があることを不思議に思われるかもしれない。その由来は、いつか語ってみたいが、とりあえずは行ってみよう。実は何十年か前に、インド哲学の碩学恵照先生をご案内して参拝したことがあった。その頃は閑散としていて、参詣者に会った記憶がなかった。
夕暮れになると、霧が自然を包み神秘的になる。（いい感じだ！　世界のすべては幻にすぎない。静寂の中に「我」だけが存在する。否、その我さえも霧にすぎないのかもしれない）などと感傷に浸りながらお寺への狭い道を進むと、なんと世界は物・人・乗用車ばかりではないか！霧の中は「渋滞」であった。昔と比べて、(大げさだが）とてつもない群衆が、霧の中に浮ぶ仏塔に吸い込まれていく。
仏塔の手前に古い洋館があって、そこが道場になっている。仏塔から出でた群衆が次々と２階の本堂に上がってくる。ブッダの前に整然と座り、マントラを唱えながらうちわ太鼓を打っている。それを先導しているのが、なんと 11 歳のアヌルッダ君である。アヌルッダは、天眼第一といわれたブッダ十大弟子の一人阿那律（アニルッダ、アヌルッダ）に由来する。横ではお姉ちゃんのシュリスティ（14 歳）が大太鼓を打っている。
姉弟は何を唱えているのか。「わたしはアナタ様をリスペクトします！」「わたしは、いつもアナタ様を敬っています！」と大きな声で繰り返している。かれらは、わが輩あるいは元少女のことをリスペクトしているのか。否、そうでもあるけど、そうでもないだろう。この「アナタ様」こそ、正に哲学の問題なのである。